

- [20] 日)という文書があり、内容は「竜門寺殿(信貴)の二百五十年忌御法事有之候歌」とある。
- [21] 鈴木博、甲斐守護武田信玄晴信の中伊那・下伊那支配、飯田市美術博物館研究紀要23:(2013.3)
- [22] 勝山小笠原家譜、天保三年
- [23] 関盛胤、伊那郡神社仏閣記、元文年間、[23]に所収。
- [24] 新編伊奈史料叢書第二巻
- [25] 高崎言周、信濃州伊奈神社仏閣、寛保年間、[25]に所収。
- [26] 伊那史料叢書第二十二巻、下伊那教育会編、山村書院、昭和14
- [27] 享保九甲辰御日記、享保9。[27]に翻刻所収。
- [28] 久保田安正編集、伊豆木小笠原家の御用日記、南信州新聞社、2007。
- [29] 御当家末書、文化五年(1805)。[29]に翻刻所収。
- [30] 福岡史近世史料篇、御当家末書 上・下、1984-1986。
- [31] 安田仁一郎、勝山藩古事記、勝山藩古事記協賛会、昭和6(1931)。
- [32] ★市村咸人、伊那史概要、信濃郷土出版社、昭和10年(1935)。
- [33] ★市村咸人、伊那史叢説 第2篇、山村書院、昭和12(1937)。
- [34] ☆市村咸人、『勝山小笠原文書について 上』、信濃第二次54号、信濃史学会、昭和21(1946)。
- [35] ☆松尾村談、松尾村談刊行委員会、1982。
- [36] 鎌倉大草紙、成立年未詳。
- [37] 結城合戦に関する記述は[5]に収録分を確認。
- [38] 結城市史第1巻古代中世史料編、結城市史編さん委員会、1982。
- [39] 松本市史上巻、松本市役所編纂、昭和八年。
- [40] 寛永諸家系図伝、寛永二十年、松尾系↓清和源氏辛二、府中系↓清和源氏辛一(寛永諸家系図伝4巻、続群書類従完成会、1981)。
- [41] 寛政重修諸家譜、文化九年、松尾系↓百九十五、府中系↓百八十八(新訂寛政重修諸家譜第3、4所収、続群書類従完成会、1964)。

国会図書館デジタルコレクションで閲覧可能な文献には★(フリー)、☆(図書館送信)の印をつけている。

あとがき

こんにちは、セキレイです。これまでの鶯丸に関して調べものをしてきたまとめ類がたまってきたのでどこかで一冊にまとめた分厚い「薄い本」を作成したいなと思っており今回のレポートはその一部です。折に触れ今回の様に、トピックス毎に適宜まとめたものを小出しにしていければなと思っています。今回は文章もあまり精査されておらず、参考文献のならばもちよとぐちゃぐちゃなままですが完成時までにはなんとかしたいと思っています。まとめの本の進捗は、twitter等でつぶやいていきます。

今回はかなりマニアックなテーマで、鶯丸の歴史というよりは伝承を追ったものになっていて、自分で書いていても「こまけくさ」と思っています。

web siteでは本稿のPDFの他、参考文献にあげたもろもろの筆者のレポートが掲載されています。そちらもご活用ください。

著者	セキレイ
Twitter	@WagtailW
発行	令和二年三月十五日

Web site - 月日星 -



「意見」感想等 - お題箱 -



鶯丸という現象

〜三月十五日の小笠原の祭祀〜

令和二年三月十五日

セキレイ@WagtailW



第5章 三月十五日の小笠原家祭祀

旧勝山藩主小笠原家に残る様々な史料に、政康が三月十五日に信州松尾の八幡宮前にて軍立てし戦勝を祈願し結城合戦に出陣し、鶯太刀(鶯丸)を下賜される戦功をたたえたことから、以降八幡宮において三月十五日を小笠原家の祭祀として行い、代々これを伝えたとする記録がある。維新後、福井県勝山市の神明社で戦前の頃まで行われていた「鶯太刀祭」は、この伝承を元に明治時代に創始されたものと考えられる。一方、結城合戦前後の時系列を整理すると「政康が三月十五日結城合戦の戦勝祈願を信州松尾にて行う」ことはありえず、その実際の起源は不明である。

本章ではこの祭祀に関する史料をまとめ、その内容と伝承について検証する。参考までに松尾小笠原家の軌跡と家系図(図5・1)を再掲する。

- 1441 嘉吉1年 結城合戦終結 鶯丸下賜
- 1534 天文3年 松尾→甲斐(この頃内訌に敗れ甲斐へ逐電)
- 1554 天文23年 甲斐→松尾(武田信玄に従い松尾を取り返す)
- 1590 天正18年 松尾→本庄(家康関東移封に伴って)
- 1603 慶長8年 江戸幕府開府
- 1612 慶長17年 本庄→古河(上田城攻の戦功で加増)
- 1617 元和5年 古河→関宿(大坂役の戦功で加増)
- 1640 寛永17年 関宿→高須(当主が幼少につき)
- 1691 元禄4年 高須→勝山(水害被害が甚大のため)
- 1867 慶應3年 大政奉還
- 1871 明治4年 廢藩置県(藩知事免官により東京に移住)

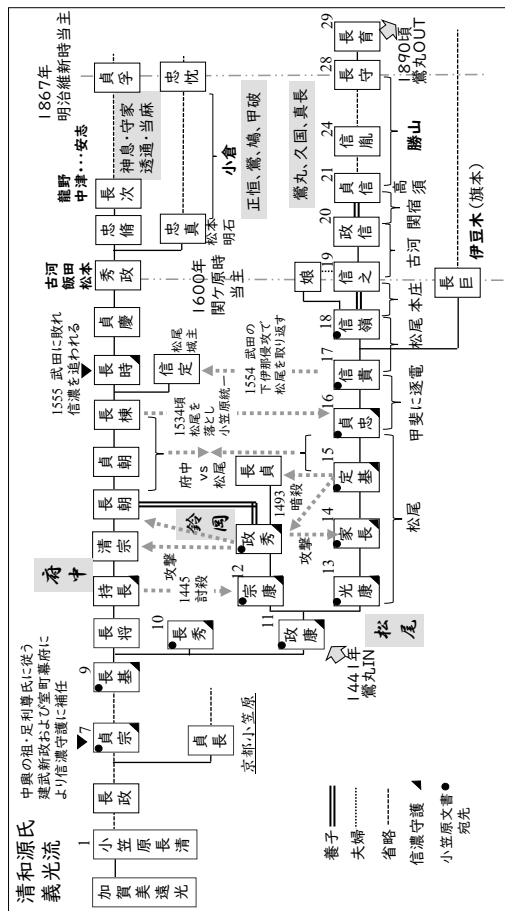


図5・1. 小笠原家家系図

松尾の八幡宮においても小笠原家の本家が離れて久しくなっても三月十五日の祭祀を行っていた記録がある。しかし、「鶯の太刀祭」という名称に関しては唯一文政十一年に勝山藩士が信州松尾に小笠原家父祖の法要の為訪れた時松尾の八幡宮を管理する神宮寺の別当に「三月十五日に祭祀がありこれを鶯の太刀祭と云う」と聞いたものが唯一の一次史料である。この史料以外には、勝山、松尾の両八幡宮の記録にその名称は見られない。

明治以降勝山では戦前まで八幡宮を合祀した神明神社において「鶯太刀祭」という名称を用いた祭祀があり、松尾の八幡宮は鳩ヶ峰八幡宮となり、「鶯の太刀祭」という名称は継承されていないものの元は三月十五日の祭祀を起源とする春季例祭四月中旬に現在も行われている。

そもそもの三月十五日という日付に関しては、その日に小笠原政康が松尾の八幡宮前において軍立てを行うことは不可能であり、実際の起源は不明である。

関連図書

- [1] 越前勝山小笠原家譜、天保2年。
信濃史料叢書(貞信まで)②及び勝山市史資料篇一(貞信以降)に翻刻所収。
- [2] ☆信濃史料叢書・下巻、信濃史料編纂会編、1966。
- [3] ☆勝山市史・資料篇第一巻(藩庁・町方)勝山市、1977。
『神宮寺』大辞林第三版(デジタルコトバンクより)。
- [4] 信濃史料八巻、信濃史料刊行会編、信濃史料刊行会1957。
信濃史料は全巻アーカイブ化。
<https://trc-adeac.trc.co.jp/Html/Home/2000710100/topg/shuroki.html>
- [6] 原成興、松尾拾遺抄、年不詳。
菱実記聞内[7]で引用。

- [7] 西門蘭溪、菱実記聞、天保・安政の頃(福井大学図書館所蔵)。
序文に天保三年とあり、安政五年の事象が記されている。
- [8] 花岡康隆編著、信濃小笠原氏、戎光祥出版、2018。
- [9] 福井県神社庁ホームページ、「神明神社」。
http://www.jijya-hkni.jp/detail/index.php?ID=20151027_144216
- [10] 戦前まで「鶯太刀祭」の名で四月十三日に神明神社で行われていたという情報は
<http://katsuyama-kanko.sub.jp/gaido/machinaka.pdf>
に記載されていたが、現在はリンク切れのようである。
(2019頭にはあつたと記憶しているのだが、定かたなし。)
- [11] 鳩ヶ峰八幡宮公式ホームページ
<http://hatogamine.shinsyu.jp/>
- [12] 寺社書上、寛文十二年。
- [13] 飯田藩所領替(脇坂家→原家)時の寺社の記録。
松尾小笠原の大略(信風の頃) [3]に翻刻所収。
- [14] 鷹吹寛、西門蘭溪『菱実記聞』―勝山藩小笠原家史料の考証、
福井大学附属図書館報 図書館 forum (10)、2013-03
<http://karin21.lib.u-hkni.ac.jp/repo/TD00001349>
- [15] 脇屋領忠、八幡宮菱葉銘、元禄五年
原本の所在は不明。菱実記聞[7]内において全文引用されており、
内において全文翻刻化されている。 [17]
- [16] 遠山長嶺、信濃夜話、文政十一年(1828)。
原本の所在は不明だが[7]内にて引用されている。
- [17] ★福井県大野郡誌 下編、福井県大野郡教育会、1912(明治45)
- [18] 石村雅子、和歌連歌の研究、武蔵野書院、1975
- [19] 資料館関係 文書目録(第一集)、小笠原資料館建設調査会、飯田共同印刷。
目録内に「松尾家系飯田日記竜門寺献香記(文政十一年三月二十四

していないにもかかわらずこれに同道しているという話が伝来している。特に小笠原文書には鷲丸の感状の内容が伝わっており、その中に「春王丸と安王丸を捕えた事」を戦功のひとつとして称賛されていることから後世の結城合戦に関する諸記録から補充したのではないだろうか。

【御当家末書】^[28]には、出陣時期が永享十一年となっている。この史料は小倉小笠原家が1800-05年にかけて小笠原家に関する古記録をまとめたものであるが、小倉小笠原家側の家譜等においては、政康の出陣時期が明確に書かれている者はないが永享十一年持氏自害の後、義教の命をうけて日光山への遺児の捜索のまま結城へ出陣ととれるような内容でもあるためこれを反映したものであろうか。それともこの古記録を参照したとされる或書に書かれていたことかは不明。

実際の出陣時期に関しては現在の私の知識ではどれが正しいのか判断しかねる状態であるが、四月に幕命を受け軍勢を揃え、五月に信濃を出立というのがもっともそれらしいと思われる。結局のところ「三月十五日」がどこから発生したのかは全くわからない。

(この章は知識が足りずかなりグダグダで申し訳ない。)

5・5 「鷲太刀祭」の名称に関する誤解

ネット上では「鷲太刀祭」とは、「勝山藩において小笠原家の三月十五日の祭祀として行われたもので明治維新以降もそれを引き継いで合祀された先の神明社において行われていた」と解釈されていることがある。これまで本章において様々な史料を引用し議論してきたように、勝山藩時代の三月十五日の祭祀を「鷲太刀

5・1 祭祀の概要

室町中期、信濃に所領を持ち、信濃守護であった小笠原政康は將軍の命により結城合戦に出陣し戦功をあげ、嘉吉元年(二二二)に鷲丸(鷲太刀友成)を下賜されたことはこれまで繰り返し述べてきた通りである。

政康の後裔である勝山藩主小笠原家の史料では信州松尾の八幡宮の祭祀に関し以下のように書かれている。

小笠原貞宗は松尾山に八幡宮を管理する神宮寺を建て小笠原家の祈願の場とした。貞宗の息子が貞宗の衣冠の像を松尾の八幡宮に合祀した。政康が結城合戦出陣前に松尾の八幡宮前にて軍立てした日として三月十五日を小笠原家の祭祀の日とし、これを臨時祭とした。その後、転封によって信濃の所領を離れるとき貞宗の像と共に八幡宮を遷宮し、さらに転封のたびに遷宮し勝山に至った。

これは【勝山小笠原家譜】^[1]に書かかれている内容である(詳細と原文は10ページ参照)。貞宗は小笠原家中興の祖で、鎌倉幕府討幕時から足利尊氏に従っていた人物である。ここに現れる神宮寺は松尾の八幡宮を管理していた寺である。明治維新よりは前には神仏習合であったため神社と仏閣の関係性は現在とは大きく異なっていた。「神宮寺」とは「神社に付属して建てられた寺院。神仏習合思想の現れで、社僧(別当)が神社の祭祀を仏式で挙行した。1888年(明治1)の神仏分離令により廃絶または分離。宮寺。」^[4]を示し、ほとんどの神社に付属しておかれていた。

また、松尾の八幡宮のメインの祭祀の日は「八月十五日」であ

祭」と称した記録は今のところ見当たらない。しかし一方で、松尾の八幡宮の三月十五日の祭祀に対しては「鷲の太刀祭」と称すると、松尾の八幡宮を管理する別当が言っていたという確かな史料が存在した。「なかったこと」の証明は「悪魔の証明」であり非常に難しいことではあるが、江戸時代に書かれた史料、特に小笠原家に関する史料を収集して書かれた【菱葉記聞】において勝山の八幡宮においては「鷲太刀祭」の名称を用いていないことから江戸時代には小笠原家内においては「鷲太刀祭」の名称は使用していなかったのであろう。

また、「鷲太刀祭」という名称からの連想なのか、江戸時代には八幡宮に鷲太刀(鷲丸)が祀られていたという解釈がネット上で散見されるが、これは明かな間違いである。鷲丸は小笠原家の家宝であったという確実な記録が残り、そもそもこれまで繰り返し述べてきた通り勝山藩内では「鷲太刀祭」という名称は使用されておらず、八幡宮に祀られていたのは貞宗の衣冠の像であると明確に記載されている。

5・6 「三月十五日の祭祀」と「鷲太刀祭」

まとめ

小笠原政康が鷲丸を下賜された結城合戦に出陣の際、三月十五日に松尾の八幡前において軍立てし、戦功をあげたことから以降三月十五日を祭祀の日とし、八幡宮を遷宮して綿々と伝えた。江戸時代における資料はほとんどが勝山藩入封以降で、それ以前の領地(本庄、古河、関宿、高須)における祭祀の直接的な記録は見つかっていないが、勝山藩時代の史料に記録されている。また、

ることがいくつかの史料に記されており、たとえば【松尾拾遺抄】^[9]では鎌倉時代の嘉元年中に小笠原長政が京都の男山八幡(石清水八幡)から勧請したことを起源として定めたとある(実際の創建は小笠原氏ではない)。これは、男山八幡宮の祭祀が八月十五日であったことからであろう。松尾の八幡宮を遷宮した勝山城東の八幡宮でも八月十五日と三月十五日が八幡宮の祭祀の日として行われている。

政康の死後家督争いにより政康の子の松尾系と政康の甥の府中系に小笠原家は分裂し、松尾系の後裔の勝山藩主家に鷲丸は伝来した。松尾小笠原家は豊臣政権下に信州松尾から転封し、てんとした後勝山藩主となる。勝山城東に遷宮された八幡宮において三月十五日の祭祀の記録がある。また小笠原家が離れて久しい松尾の八幡においても同じ由来を持つ祭祀が三月十五日に行われており、特にこの松尾の八幡では「鷲ノ太刀祭」と称するという幕末の勝山藩士・遠山長嶺による記録が残る^[10]。一方、勝山城東の八幡宮における祭祀を江戸時代に「鷲太刀祭」と称した記録は見当たらない。

また、政康直系を称し(実際は政康甥を祖とする)政康を崇敬していた府中系の小笠原家(小倉藩主家)には政康が結城合戦前に八幡に軍立てしたというような事柄は伝承されていないようである。

慶應三年(1857)に大政奉還となり、明治新政府が発足する。明治元年(1868)に明治政府より神仏習合を禁止する神仏分離令が発令されると多くの神宮寺は廃止になる。明治二年の版籍奉還により小笠原長守は藩知事に任命されるも明治四年の廢藩置縣により

藩知事を免官。翌月小笠原家は東京の旧勝山藩江戸藩邸（現中央区久松町）に移住する。同年勝山城は廢城となり、城濠脇にあった八幡宮は近くの神明社に合祀された^[17]。開始の年は不明だがこの勝山の神明社において旧暦の三月十五日に相当する日の付近である四月十三日に「鶯ノ太刀祭り」の名前で戦前まで祭りが行われていた^[10]。この名称は、先述の遠山長嶺による「信州松尾の八幡で三月十五日の祭祀を鶯ノ太刀祭りと呼ぶ」と記したことを明治以降に勝山に取り入れたものと推測される。

5・2 小笠原家祭祀場としての八幡宮

勝山藩小笠原家は旧領の松尾から勝山に至るまで、移封のたびに八幡宮を遷宮していたということを記した史料はあるが、そのうち現存しているのは信州松尾の八幡宮のみで、明治以降鳩ヶ峰八幡宮と呼ばれている。また、文献の中において確たる存在を確認できるのは、越前勝山城東の八幡宮である。これは、城東といっても勝山城濠のすぐ脇でギリ城内ではないくらいの近場である。この八幡宮は明治四年の勝山城廢城の後、勝山市内の神明神社に合祀され現在に至る。

5・2・1 信州伊賀良庄嶋田村八幡(松尾の八幡宮)

小笠原家が祭祀の場としていた松尾の八幡宮（現在の鳩ヶ峰八幡宮）は古くは伊那郡伊賀良庄嶋田村と呼ばれた現在の飯田市松尾に鎮座している。史料には嶋田村八幡宮と書かれているが、本文中においては「松尾の八幡宮」と表記する。江戸時代にこの八幡宮に関する記録^[2]では、鎌倉時代の正嘉年中（1257-1259）に小笠原長政が京都の男山八幡宮（現在の石清水八幡宮）より勧進し

たという。しかし、これは創建よりも後世（小笠原氏支配の時代以降）に後付けされたものと考えられている。小笠原家内の記録では小笠原家が松尾のある伊賀良庄に所領を宛がわれたのは鎌倉時代の初頭であると書かれているが、実際には鎌倉幕府を討幕した後醍醐天皇による建武新政下（1333-35）においてであると現在では考えられており^[8]、松尾の八幡宮の実際の創建は鎌倉時代の北条氏一族の江馬氏によるものと考えられている。

八幡に残る棟札には、小笠原家が修補を行った記録が残っているがこの中で信頼しうる内容は、室町末（戦国時代）永禄十一年における小笠原信貴による修補以降からであると考えられている。この信貴は、父の代の天文3年（1534）頃、府中家との家督争いに敗れ甲斐に逐電し、二十年後の天文23年（1554）武田信玄の伊那侵攻において先陣を務め松尾城を取り返した人物である。松尾の八幡は信貴が松尾に復帰したことにより復興したものの、子の信嶺の代において天正十年（1590）に松尾から武蔵国新庄に転封したときに一時荒廃したと言われる。徳川家康が信嶺の養嗣子で嫁婚の信之に旧領である信濃への転封を打診するも信之がこれを拒否したと言われている。信之の出自はいわゆる徳川四天王の酒井元忠の三男で、信濃には特に思い入れはなかったからと言われている。そこで、慶長5年（1600）に信嶺の弟で、関ヶ原の合戦で功のあった小笠原長巨が分家独立し、一千石の旗本として伊賀良庄の伊豆木（松尾城からおよそ10キロメートル）に封じられた。翌慶長6年（1601）に、府中系小笠原家の秀政が五万石で松尾を所領に含む飯田藩に封じられた。秀政の修繕により、しばらく荒廃していた松尾の八幡宮が再建されたと言われている。その後府中

5・4・2 政康出陣の時期に関する記録と考察

これまで引用した様々な史料に於いて、「小笠原政康が結城合戦出陣に際し松尾の八幡宮前にて軍立てを行ったことを起源として三月十五日が小笠原家の祭祀の日となった」ということが書かれているが、この日付には大きな矛盾があることがわかる。まず、小笠原家内における史料においても永享十二年と嘉吉元年の二通りの記録があり、時系列からどちらの年の三月十五日においても信州松尾の八幡前にて軍立てすることはできない。前者では、結城出陣の命令が幕府より出ていない。この時代の情報の伝達には大きなタイムラグがあるので下総→京都→信濃には早くても半月はかかるであろう。その日に鎌倉府の命で上杉憲信らが鎌倉から出立しているが、当時鎌倉府は幕府から独立した組織で政康の信濃は幕府の管轄のため目国の問題でもなければ幕命でないと動けないだろう。後者では、すでに結城において信濃勢を率いて陣を構えていることが確実である。

表5・2に小笠原政康の出陣の時期に関して記載のある史料をまとめる。表に示す通り、史料によって出陣時期はまちまちとなっている。表にある【寛永諸家系図伝】^[38]と【寛政重修諸家譜】^[39]は元は小笠原家から提出された家譜を編纂したものであるにもかかわらず、政康の出陣の時期を明確に永享十二年の五月と記載している。特に【寛永諸家系図伝】は、表中の史料のなかでも最も編纂時期が早い。この頃には、小笠原家内では五月としていたが後にすでに成立していた三月十五日の祭祀の日との整合性をとるために小笠原家側の家譜から消えたのであろうか。

【松本市史】^[37]においても【越前勝山小笠原家譜】に記載の結

表5・2：小笠原政康の結城合戦への出陣時期を記した資料一覧
それぞれの成立時期を記載

嘉吉元年三月十五日	
政康の八幡前の軍立てと三月十五日の祭祀に言及。	
八幡菱華銘	1692
御旧記	1790頃
菱葉記聞	1860頃
永享十二年三月十五日	
政康の八幡前の軍立てと三月十五日の祭祀に言及。	
越前勝山小笠原家譜	1832
永享十二年五月	
寛永諸家系図伝(松尾系)	1643
寛政重修諸家譜(松尾系)	1801
伊那郡神社仏閣記*	1740頃
永享十一年	
御当家末書	1805

* 出陣時期を五月としつつも三月十五日の軍立てに言及。

城合戦出陣の時期を「三月十五日」とすることへの矛盾を指摘し、この日付は他の合戦への出陣時期ではないだろうか」と記している。

そもそも、松尾系小笠原家において小笠原政康の頃の歴史は勝山藩主家に伝わった「小笠原文書」と呼ばれる将軍からの書状、感状や譲り状の内容以外の家の記録的なものが欠けている。特に、内訌に敗れ甲斐に逐電し武田に従い松尾を取り返した三代（定基、貞信、信貴）に関する記録はことごとく欠けている。また、政康が日光において持氏遺児を捜索したことが結城合戦後のこととして記されていたり、春王丸・安王丸の京都への護送に政康は同道

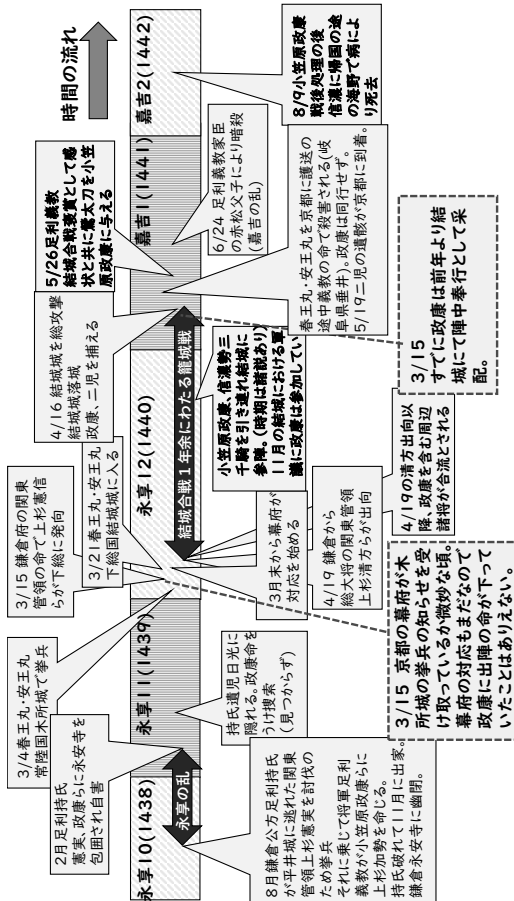


図 5・2・2. 結城合戦前後の時系列

系小笠原家は慶長 8 年 (1603) に父祖の地の信濃松本藩 (府中) に 8 万石で加増移封したが、¹伊豆木小笠原家は旗本として伊豆木の地で明治維新を迎えている。この伊豆木小笠原家が松尾の八幡宮で三月十五日や八月十五日の祭礼に家臣を遣わしている記録が残っており^[26]、松尾小笠原家の本家は松尾からいなくなっても、松尾の八幡宮と小笠原家との関わりが残っていたことが伺える。

八幡宮に残る棟札には鎌倉時代より小笠原家による修補の記録が残っているがその内容が信頼できるものは少ないとされている。これは八幡宮と神宮寺にいざこざがあったためであろうとされている^[34]。明治元年の神仏分離令により神宮寺は廃止となった。八幡宮は現在は鳩ヶ峰八幡宮と呼ばれており、三月十五日、八月十五日の祭日は明治以降新暦となったときに四月十五日、九月十五日に改められ、さらに現在行われている春季例祭 (四月第二土・日曜日) および秋季例祭 (九月第二土・日曜日) となり現在に至る。(明治以降の詳細は 5・3・9 参照)

鳩ヶ峰八幡宮の²ごまに現在記載されている社歴は現在の史的見地からの理解とは必ずしも一致してはいないが、参考までに記しておく。

【鳩ヶ峰八幡宮 HP】^[11]

「祭神と由来」中世の伊那郡伊賀良庄は鎌倉幕府の有力支族たる江馬北條氏によって支配された地域であり、当初の八幡宮は山城の国より石清水八幡を勧請して穴八幡としてお祀り申し上げたのです。その間に於ける、江馬氏によるこの地域の文化的開発と向

¹その後さらに府中系小笠原家は明石藩 10 万石 (1617-1632) を経て、豊前小倉藩 5 万石 (1632-) に移封されている。

関東管領の命により上杉憲信らが鎌倉を立出している。三月末より京都の幕府が対応の検討を開始し、四月十九日に総大将の上杉清方とが鎌倉を立出した。この後、小笠原政康ら周辺諸将が合流したとされている。七月には結城城は信濃勢を含む幕府方の軍勢により包囲されている。十一月の結城における軍議に小笠原政康が出席していた記録と、また政康が信濃勢三千騎を率いて参陣していた記録が客観的史料に残されている。結城の籠城は長期戦となるが、翌年四月十六日の総攻撃で落城した。合戦の旗印であった春王丸と安王丸は女兒の姿となり城から逃げようとしたところを小笠原政康、長尾実景により捕えられた。(後世の軍記などで二児を捕えたことと有名なのは長尾実景のほう。)二児は京都へ護送されるが、東海道途中の垂井駅 (岐阜県垂井) において京都からの使者により処刑された。この護送には、政康は同道しておらず長尾実景が同道している。五月十九日には二児の遺骸が京都に到着している。五月二十六日には小笠原政康を初め結城合戦に戦功のあった諸将に感状が出されている。政康は持氏に与した残党や残る持氏の遺児の捜索のため、結城に逗留していた。京においても結城の戦勝は影響が大きく、連日戦勝祝いの宴が開かれていた。鶯丸を下賜した一カ月の六月二十四日戦勝祝いの席として招かれた家臣邸宅で將軍義教は暗殺されている。

政康は義教暗殺事件後も引き続き結城の残党の捜索を命じられていたが、嘉吉の乱の混乱のおかげでか他の持氏遺児は無事逃げ延びていた。しばらくして遺児は鎌倉公方に返り咲き、再び幕府と相争うこととなる。

(^[35]、^[36] 等参照)

上は顕著なものであり、この事績には鳩ヶ峰八幡宮の造営と禪利開善寺の創建があります。

この二つは北條氏没後に於いても、この地の地頭であった小笠原氏によって厚く護持崇敬されてきました。なお、小笠原氏は建治三年 (一二七七) より弘安十一年 (一二八八) までに松尾城の北、現在の位置に八幡宮の社殿を造営し、ここに御遷座申し上げました。

伊那地方中世の武家代表格である小笠原氏が代々鎮守の神と崇め奉り、冠婚の式等は此の社前にて行われ、十七代、四百六年間は松尾城主としての此の八幡宮を崇敬し、その建築修理、営繕等みな領主小笠原氏の寄進と領内氏子の信奉とにより行われてきました。

5・2・2 越前勝山城内

小笠原家が高須藩から勝山藩に転封したのは元禄四年 (1691) の夏であった。高須は現在の岐阜県南端の海津市で名古屋西部に位置し、長良川と木曾川に挟まれた輪中地帯である。高須が度々水害で大きな被害をうけたため、小笠原家が所替えを希望し認められたの転封である。

江戸幕府開府時に本庄藩から始まった小笠原家は元々は城持ちの「城主」であった。古河、関宿と加増転封したときも同じように「城主」であったが、高須藩に転封してきて驚いたことに城は無く「陣屋」しかなかった。「城主」を城なしの藩に転封させてしまったのはどうやら幕府の手違いだったと言われているが、高須にいる間の 50 余年は築城はかなわず「城主格」という扱いであった。

元禄四年の水害で甚大な被害を受けた小笠原家は幕府に願ひ出て勝山に転封する。勝山は元は城があつたが寛永元年(1624)にそれまで藩主であつた松平家が転封したときに廃城となつてゐた。その後勝山藩は幕府領であつた。小笠原家は元禄4年(1691)に入封して以降、再三築城を幕府に願ひ出て遂に悲願の築城が宝永5年(1708)認められた。

勝山藩に入封して勝山城東に八幡宮が遷宮され、それを管轄する神宮寺が建立された。神宮寺の別当は白山平泉寺から招いてゐる。松尾の時代より小笠原家に仕えていた脇屋家の脇屋領忠による、勝山に至るまでの小笠原家の足跡を書いた【八幡宮菱華銘】^[15]は入封翌年の三月十五日の祭祀の時のもののではないだろうと思われ、政康の結城合戦の戦功と鶯丸が下賜されたことなどが書かれてゐる(5・3・3 ページ参照)。

明治元年の神仏分離令により神宮寺は廃止されたと考えられ、明治4年7月14日(旧暦)に廢藩置県となると勝山城は廢城となり、八幡宮は翌月神明神社に合祀された。また、小笠原家は8月末に東京へ移住してゐる。

【福井県神社庁HP】「神明神社」^[9]

八幡神社の祭神豊田別命は正嘉元年(1257)に小笠原長政君によつて男山八幡宮から勧請された。菱實紀聞に「信州より御所替の後も絶えずして今なお越前勝山の八幡宮の祭日は3月15日也」とあるのは、結城攻めに勲功があつて第6代足利義教將軍より鶯太刀を小笠原太夫入道に感状と共に賜つたので、3月15日を「鶯太刀の祭日」と定めたものである。元禄4年(1691)に美濃国高須から移封の際、城東に遷座した。明治4年8月に神明神社本殿に

ここでも松尾の八幡宮と「鶯の太刀祭」について触れられてゐるが、おそらくは先述の市村からの情報ではないかと個人的に考へてゐる。【松尾村誌】では、「第二編歴史 第三章 中世 第一節 鎌倉時代」および「第三編現代 第三章 教育文化 第七節 宗教」に鳩ヶ峰八幡宮のことが記されているが、ここには小笠原家に関連する「三月十五日の祭祀」や「鶯の太刀祭」に関する記載はない。昭和57年当時の祭日の日付と【伊那史概要】にある、「明治の代、新曆の行はれるようになってからは四月十五日、九月十五日にかわつたが、現在は養蚕の関係でまた一カ月づつ延びだ。」という記述と照らし合わせると、「四月十五日」の祈年祭というのは、かつて「鶯の太刀祭」であつた祭日を継承してゐるのものであろう。(おそらく一カ月延びたというのは九月のほうの祭日のみを指しているのだろう。)さて、現在の鳩ヶ峰八幡宮の祭日を見ると、四月と九月の第二土・日曜日に行われている春季と秋季の例大祭がかつて嶋田村八幡宮と呼ばれた頃の三月十五日と八月十五日の祭日に相当することがわかる。(おそらく昭和57年以降に再び十月→九月に変更されたと思われる。)

【鳩ヶ峰八幡宮 公式HP】「季節の祭事」

春季例大祭(宵宮)	4月第2土曜日
春季例大祭(本宮)	4月第2日曜日
秋季例大祭(宵宮)	9月第2土曜日
秋季例大祭(本宮)	9月第2日曜日

拡大解釈をすれば「鶯の太刀祭」は現在まで脈々と続いてゐると言える。

合祀し同9年6月8日に村社に列せられた。

福井県神社庁の神明神社のホームページには左記のように書かれてゐる。ここでは【菱實紀聞】の参照部分では政康の陣立て部分のみを示している。読みようによつては、江戸時代から「鶯太刀祭」の名称で呼ばれてゐたかの印象を与えるが、明確にそのように書かれてゐるわけではない。

5・3 祭祀の記録

勝山小笠原家の記録には、政康が結城合戦出陣前に壺廟前で軍立てしてより三月十五日を小笠原家の祭祀の日とし代々綿々と伝えたとされている。しかし、残つてゐる記録としてはすべて江戸時代以降に編纂されたものであり、そのほとんどが勝山人封(元禄4年・1691)以降の時代のものである。

表5・1に小笠原家の三月十五日の祭祀に関する記載のある史料をまとめる。それぞれの内容は、小笠原家の歴史をまとめたもの、信州伊那の寺社の記録をまとめたもの、日記において小笠原家が祭祀に関わつていたりリアルタイムの記録など多岐にわたる。特に【信濃夜話】は、勝山藩士の遠山長嶺が小笠原家父祖の法要で松尾を訪れた時に八幡宮を所管する神宮寺の別当に「今尚三月十五日に祭祀がありこれを鶯ノ太刀祭という」という話を聞いたことを記している。本章ではそれら史料の内容をひとつひとつ引用し、この「三月十五日の祭祀」がいかなるものであつたかを検証する。

一方、小笠原政康の出陣時期に関しては史料によつてその時期が大きく異なつてゐる。これらに関しては、5・4章の表にまとめ議論する。

5・4 「三月十五日」の日付に関する検証

小笠原家の記録等に、三月十五日の祭祀は政康が結城合戦出陣前に松尾の八幡宮の社前で軍立てし、戦功をあげたことに始まるとされている。また、5・3・3節において示したように、小笠原家内の記録に於いて「永享十二年(1440)」「嘉吉元年(1441)」の二説存在している。しかし、結城合戦の時系列を整理するといずれの「三月十五日」にも信州松尾において出陣の軍立てを行うことは不可能であることがわかる。

5・4・1 結城合戦前後の時系列まとめ

結城合戦は、永享十年(1438)に始まつた足利持氏と幕府が直接対決した永享の乱を発端としている。持氏は永享十一年(1439)二月に蟄居先の鎌倉に於いて小笠原政康をはじめとする諸將に包圍され自害した。この持氏の自害と前後して、持氏の嫡男も自害してゐたが元服前の幼い遺児らは逃れることができた。一部の遺児は二荒山(栃木県日光)に逃れたとされ、政康はこの搜索を命じられていたとされる。この時二荒山に逃れてゐたのは、春王丸・安王丸であつたと後世の様々な史料に記されているが、最近の研究では他の遺児であつた可能性が示唆されている。

図に結城合戦前後の時系列を示す。まず永享十二年(1440)三月四日に常陸国木所城(茨城県桜川市岩瀬)において春王丸・安王丸を奉じて蜂起したことに始まる。その後三月二十一日に下総国結城城(茨城県結城市)に入った。まず三月十五日に鎌倉府の

¹⁸ 岩瀬と結城は茨城県水戸と栃木県小山をつなぐ結城街道(国道50号)で約30キロ、JR水戸線で七駅の距離。

の八幡社・松尾八幡社は小笠原家の氏神一の社前に祈請をこめて軍立し、終には足利の公達を擒にするやうな大功を立て、將軍からはかかる恩賞があつたので、伊那郡松尾の神宮寺ではそれを記念するため、年々三月十五日を以て、「鶯の太刀祭」といふのを行ふことになつた。その後この祭事は年々の例になり、三月十五日、八月十五日¹⁷の再度行はれることになつた。明治の代、新暦の行はれるようになってからは四月十五日、九月十五日にかわつたが、現在は養蚕の関係でまた一カ月づつ延びた。

【伊那史叢説 第二編】市村威人 昭和12年(1937)^[32] 「島田村八幡祭」

県社の松尾村八幡社は甲斐源氏加賀美二郎遠光の勧請であると云ひ伝えられて居る。棟札には後深草天皇御宇正嘉二年とあつて、小笠原家の氏神として代々崇敬して来た。三月十五日と八月十五日との一年両度に祭礼を執行し、八月十五日には相撲を興行することと定まつて居た。

【勝山小笠原文書について】市村威人昭和21年(1946)^[33]

《小笠原文書に含まれていた結城合戦の感状の内容に関して》
この鶯の太刀は小笠原家の重宝として連代綿々相伝へ、信州松尾の神宮寺では年々三月十五日に鶯の太刀祭といふを行ひ、越前勝山神明宮の祭日も同じく三月十五日であつた。

¹⁷ これまで掲示してきた史料にもある通り、八月十五日の祭日は勧請元とされる男山(石清水)八幡宮の祭日に起因する。

市村威人は伊那地方の郷土史家の大家で、大正年間に小笠原家当主から家蔵の文書類を直接拝見している。明治12年の【伊那史叢説】では、三月十五日の祭祀に触れているものの小笠原家との関連は論じていない。勝山側を「神明宮」としているの、明治以降の勝山の祭祀に関して見聞していたことは間違いないだろう。また、市村氏は松尾側を「鶯の太刀祭」と称し、勝山側に関しては日付が同一であるとの表現をしている。【伊那史概要】には、章末の参考文献に【勝山藩旧事記】(勝山藩古事記の誤植であろう)がある。市村は【勝山藩古事記】を通じて「松尾の八幡宮(神宮寺)で三月十五日に鶯の太刀祭を行つていた」という情報を松尾側に持ち込んだのではないかと考えられる。

【松尾村誌】昭和57年(1982)^[34] 第三章 中世 第三節 室町時代

政康の結城合戦については色々の物語が伝わっている。政康は結城合戦に出陣に際して三月十五日に嶋田の八幡宮の社前で戦勝を祈願して出かけたが、勝利を得たのでこれから三月十五日をもって鶯の太刀祭を行つたとか。

第三章 教育文化 第七節 宗教

鳩ヶ峰八幡宮

祭日 《注：この書籍発行昭和57年当時》

大祭 祈年祭 四月十五日

例祭 十月五日(昭和二十年までは十月十五日)

新嘗祭 十一月二三日

表5・1: 三月十五日の小笠原家祭祀を記した史料と編纂年

成立時期	対象	史料名	筆者
		内 容	
1672 寛文12	尾松	寺社書上(A) 飯田藩所領替(脇坂↓堀)時の寺社の記録	
1692 元禄5	山勝	八幡宮菱華銘 勝山に至るまでの小笠原の概略。	脇屋領忠
1724 享保9	尾松	享保九甲辰御記録 伊豆木小笠原家の日記。	
1730-45 信胤の代	代歴	松尾小笠原の大略 信胤までの小笠原の概略。	
1736-41 天文年間	尾松	伊那郡神社仏閣記 寺社の記録	関盛胤
1741-44 寛保年間	尾松	信濃州伊那神社仏閣 寺社の記録。Aを原拠とする。	宮崎言周
1802-05	尾松	御当家末書 小倉小笠原収集の小笠原関連史料集。	
1780-99 長教の代	代歴	御旧記 天保2以前の家譜的なものか。Bで引用。	
1828 文政11	尾松	信濃夜話 紀行文。鶯太刀祭に唯一言及。Bで引用。	遠山長嶺
1840-57 長守の代	山勝	御用留(松井文書) 勝山小笠原家臣の年中行事を記した日記。	
1832 天保2	代歴	越前勝山小笠原家譜 代々の家系図と概略。	
1860頃 安政の末	代歴	菱実記聞(B) 勝山小笠原家に関する古記録を採録。	西門蘭溪
年代不詳	代歴	松尾拾遺抄 小笠原の略歴的なもの。Bで引用。	原成興

5・3・1 菱実記聞における記録

勝山小笠原家の三月十五日の祭祀に関する情報のまとめとしては【菱実記聞】の記録がもっとも網羅的である。明治以降、「三月十五日の小笠原の祭祀」に関する諸記録はすべからくこの【菱実記聞】を参考にしてしていると思われる。

【菱実記聞】とは、幕末の小笠原家の侍医西門蘭溪が小笠原家の古記録を蒐集採録し、時に蘭溪が自説を付記したものである^[14]。序文には天保壬午(三年)(1832)と記されており、本文には安政五年(1853)の出来事も含まれている。このことから、蘭溪が天保三年より書き始め安政以降に完成したものであると思われる。

本書の項目は小笠原家に関する様々な項目を以下の通りに記している。

上之巻

御称号 源姓 御紋 御同流御分流 御代々

御合戦 御規模 御旧例

下之巻

御城地 在土御屋布 寺社 長清君方墳銘

開善時殿肖像贊 犬連物申状 菱華銘 生卒辯

この中で、政康の結城合戦と鶯丸にかんすることがしばしば記述され(御代々、御合戦等)、特に「寺社」の八幡宮の項目には三月十五日の祭祀に関する詳細が様々な古記録を引用し記されている。少し長くなるがこの八幡宮の部分を全文掲載する。

【菱実記聞】「寺社の事」の節 西門蘭溪(天保三ノ安政頃)

八幡宮 信州伊賀良庄降松郷嶋田村にあり別当真言宗高野山末降松山神宮寺聖胎院
勝山城中にあり別当天台宗日山

八幡宮菱華銘云七代貞宗朝臣のとき開善寺と与に神宮寺を建て祈願所とす其子政長君のとき貞宗朝臣衣冠の像を八幡宮に合祀せり御旧記云十一代政康君結城合攻のとき此社前軍立して終に戦功をえたり足利將軍より鸞太刀を拝領す夫より三月十五日を臨時祭の始とす

松尾拾遺抄云正嘉四年中²長政君男山八幡宮勸請翌年八月十五日祭祀始る嘉吉四年宗長君³加修補貞宗君置神宮開善の両刹其後政長追崇先考貞宗而彫刻其像今祀八幡所謂衣冠像是也応永二十二年宗康君又修補嘉吉元年結城攻已後三月十五日為神拜の期文明九年政貞大永四年貞基君又修補永祿十一年信貴使常葉常陸名子美作奉行継堂之⁴

遠山信濃紀行云神宮寺の旧記をみるに正嘉二年十一月長政君のとき上臺奉行常葉常陸守とあり宗長長秀光康定基信貴五君のときも御修補あり 奉行人名口之

当社の祭礼八月十五日也臨時祭三月十五日也是を鸞の太刀祭と云

² 正嘉年中は鎌倉時代(1257-59)。小笠原家の家譜等にするされた歴史では信濃松尾に所領を安堵されたのが鎌倉時代としているが、実際にはこの頃は北条氏の支配。鎌倉時代終焉後の建武新政下(1333-35)において安堵されたのが始まり。

³ 原文ママ。小笠原宗康は鎌倉時代末の人物で貞宗の父。元号は嘉吉ではなく嘉歴ではなからうか？ 嘉歴四年(1336)であるが、松尾の所領を安堵されたのは建武新政下での貞宗からなのでどちらにしても正しくはない。

⁴ 応永二十二年(1415)、嘉吉元年(1441)、文明九年(1477)、大永四年(1524)、永祿十一年(1568)。

るわけではないが)

【福井県神社庁HP】「神明神社」^[9]

菱實記聞に「信州より御所替の後も絶えずして今なお越前勝山の八幡宮の祭日は3月15日也」とあるのは、結城攻めに勲功があつて第6代足利義教將軍より鸞太刀を小笠原太夫入道に感状と共に賜つたので、3月15日を「鸞太刀の祭日」と定めたものである。

現在の神明神社の説明においては(一部再掲)「鸞の太刀祭」に関してこのような記述となっている。

戦前まで四月十三日に神明神社で「鸞太刀祭」が行われていたという記録がウェブ上の資料にあったのだが現在リンク切れになっているようで入手できなかった。2019初頭くらいにはまだあったような気がするのだが、PDFをダウンロードしておけばよかった……。

明治以降の「鸞太刀祭」というものが、いかなるものであったのかなど、まだまだ研究の余地がある。

5・3・9 明治以降の記録(松尾側)

松尾の八幡宮で行われていた三月十五日の祭祀が「鸞の太刀祭」と呼ばれていたことは、【信濃夜話】内に記された「神宮寺の別当が言っていた」ことから明らかである。しかし、この記録は勝山藩士によるものであり、幕末の勝山藩内には伝わっていたが松尾側で江戸時代の寺社記録や伊豆木小笠原の記録には「鸞の太刀祭」という名称は残されておらず、明治時代においてもその名称が伝承されていたという資料は本研究ではまだ得られていない。

と別当云へりとあり

蘭溪曰伊那記をみるに信濃国伊奈郡嶋田村八幡宮は昔伊那郡司源為公⁵永承中頼義東征時丹精の志あるに依て親属たる東寺僧海円を招き石清水八幡を移して祭之東征凱陣の後為公降松郷に神祠を立て号松尾八幡宮^{今嶋田村の八幡宮是也}其後長清此国移てより修營不忘慶長十六東照宮田十五石を寄付し玉ふとありこれによれば初めは伊奈直人為公の勸請なる事著名也

長清朝臣信州へ移り玉ひしより御家の物にて貞宗朝臣の御像をさへに合祀せし也御所替の度々に貞宗朝臣の御像は移しもて行けば信州の嶋田村にあるは元の八幡宮斗になりし也されど今尚臨時祭ありて鸞の太刀の祭と云事のこる事御家の規模なるべし也今勝山にては貞宗朝臣の御像を直に八幡宮と移し奉りて祭日は三月十五日を用ゆ別当は白山平泉寺より移住して守之

(セキレイによる翻刻。原文カタナカ表記はひらがなにしている。また、実線と波線はセキレイが付記した。)

この記述からわかるように、政康が結城合戦出陣前に松尾の八幡宮前にて軍立てしたことを起源として、以降三月十五日を八幡の臨時祭として伝えたことが書かれている。元は松尾の八幡に中興の祖貞宗の衣冠の像が祀られていたが、所替えのたびに八幡を遷宮するとともに貞宗の像も移している。遠山による信濃紀行(引用場所によっては信濃夜話となっている)によると、松尾の八幡宮の臨時祭は三月十五日でこれを鸞の太刀祭と言うと別当が言っていたことを記している。このことに関し、蘭溪は貞宗の像は所

⁵ 永承10(1140)。頼義東征伐(東北でおこった前九年の役のことと思われる)。

大正から昭和戦後まで南信濃の郷土史家の大家である市村威人による資料にはたびたび松尾の八幡宮における「鸞の太刀祭」への言及があるが、その参考文献には【信濃夜話】を参考文献とする【勝山藩古事記】が挙げられているため、勝山から持ち込まれた情報である可能性が高い。

なぜ神宮寺の別当が言っていた「鸞の太刀祭」という名称の伝承が本場の松尾ではなされていなかったのか、に関しては想像できないのだが八幡宮とそれを管轄する神宮寺の仲が非常に悪かったことや、神仏分離令により神宮寺が廃止されたときに諸記録が破棄されたことに起因するのだろうか。

「神宮寺」とは「神社に付属して建てられた寺院。神仏習合思想の現れで、社僧(別当)が神社の祭祀を仏式で奉行した。とあるが、八幡宮と神宮寺でそれぞれ三月十五日に祭祀を行っていたのか、神宮寺主導で八幡宮の祭祀を行っていたものなのか、神仏融合時代の神社と神宮寺のありようを私は理解していないので大いなる誤解があるのかもしれない。

【伊那史概要】市村威人 昭和10年(1935)^[31]

第八章 室町時代・第二節 結城の戦・四 鸞の太刀祭

將軍義教は政康の功を称して鸞の太刀と呼ばれる名刀に感状を添へて賜つた。それは

《略・政康宛の鸞丸下賜の感状の内容》

また長子宗康への感状は

《略・宗康宛の感状の内容》

是より先、政康は結城の出陣に際して、三月十五日に伊那郡松尾

書いてあるが軍立てした日は明確には三月十五日としておらず、出陣の時期も永享十一年としている。(出陣の時期に関しては5.4で議論。

5・3・8 明治以降の記録 (勝山側)

【福井県大野郡誌・下巻】『勝山町』の項^[17] 明治45年

村社八幡神社 祭神菅田別尊 小笠原貞宗

神明社内に合祀せり、旧藩主小笠原家の鎮守なり、明治九年六月村社に列せらる、其由緒は古書に所見少なからず、其臨時祭を一鷹太刀の祭と云ふ。

(略：菱実紀聞、松尾拾遺抄、信濃紀行(筆者注：信濃夜話の誤記と思われる)、町誌稿、八幡宮菱華銘における小笠原家の八幡宮の祭祀に関する文を引用している。)

鷹太刀の祭 は三月十五日の臨時祭にて、小笠原家の歴史に、代関係あり。往時は重要視されき。

(略：御旧記、信濃夜話、菱実紀聞、町誌稿における三月十五日の祭りについて等の文を引用している。)

【福井県大野郡誌】には、右記の通りかかれており勝山藩主小笠原家において行われていた祭祀が「鷹太刀の祭」という名称であったかのような印象を与えるが、これはミスリーディングな表現で引用の内容を全て読んでも、【信濃夜話】(8参照)のみが「鷹ノ太刀祭」の名称を言及しており、それは信州松尾の八幡であることが書かれている。このため、やはり「鷹太刀祭」の名称は江

替によって移されてしまっていて松尾の八幡に貞宗は祀られていないが今尚臨時祭が残っていて鷹の太刀祭りという事が残っていることはこれが小笠原家の証拠(規模・手本、仕組み、模範、証拠など)であろうとし、今勝山では貞宗の像を移してあり三月十五日を祭日としていることを書いている。

また、ここのある通り勝山城内の八幡において、三月十五日の祭を「鷹太刀祭」と称する記述はどこにも見られない。(ネット上では江戸時代から勝山藩内で「鷹太刀祭」と称していた、と解釈されてしまっている。本件は5.5節で議論する。)

【菱実記聞】において、八幡宮の節以外でも「鷹の太刀祭」の話題が触れられている。左記に例を示すが、蘭溪は「鷹太刀祭」を松尾の八幡宮に対してのみ示していることがわかる。

【菱実記聞】「御旧例の事」の節 西門蘭溪(天保三、安政頃)

十一代政康君のとき嘉吉元年酉年三月十五日信州松尾八幡宮の社前に軍立てして下総国に赴き同四月十六日結城柵を隔る春王丸安王丸二公氏行方をしらず或人二荒山に隠ると則政康州懸に触て日二荒山を焼んとす此虚に乗じて二公子形を女兒に仮てすたる遂に擣られて濃州にて送る也京使到着して二公子を垂井駅にして列る是より以降三月十五日を以て当家神拝の賽日とす臨特の祭始て此御旧記

⁶ 勝山小笠原家の史料では春王丸と安王丸を政康が垂井まで護送したと書かれている。しかし、一か月後の嘉吉元年六月の義勢暗殺の「嘉吉の変」を伝える結城への書状の宛先に政康が含まれていることから、政康は結城に留まっていたことが確認されている。

戸時代においては信州松尾のみにおいて呼称されていたことがわかる。ちなみに、この【大野郡誌】に引用されている文献において【町誌稿】以外はすべて【菱実記聞】内に引用されているものであり、「信濃夜話」とかかれるべきところが一か所「信濃紀行」となっているという同じ間違いもあるため【大野郡誌】は【菱実記聞】のみを参考している可能性が高い。

【勝山藩古事記】 安田仁一郎 昭和6(1931)^[30]

《略：結城合戦と鷹丸下賜と感状の内容》

鷹太刀祭

政康自是以三月十五日爲当家報賽之神拝日

三月十五日之祭祀濫觴于此矣通代綿々到今也

信州松尾神宮寺に於ては今尚三月十五日を鷹の太刀祭と云ひて伝来せり

勝山神明社に合祀されある八幡神社祭(旧藩主小笠原家の鎮守にして元神宮寺にあり祭神小笠原貞宗公)も同じく三月十五日以て祭日と定められたり

【勝山藩古事記】においても、松尾の神宮寺にたいして「鷹の太刀祭」と称しているが、勝山側に関しては明確に「鷹の太刀祭」という表現を用いていないように感じる。この【勝山藩古事記】の参考文献には、【菱実記聞】が含まれていないが【大野郡史】というのが含まれており、これは先述の【福井県大野郡誌】を示しており、そこから「鷹の太刀祭」を参照しているのではないだろうか。(他にあげられている参考文献をすべてチェックできてい

信州より御所替の後も不断して今猶越前勝山の八幡宮祭日三月十五日也と云り

回藩遠山長嶺信濃夜話云信州松尾神宮寺にて今尚三月十五日を鷹の太刀の祭と云と《以下略・蘭溪による「春王丸・安王丸を政康は垂井まで護送していない」という考察》

(セキレイによる翻刻。原文カタナカ表記はひらがなにしてある。また、実線と波線はセキレイが付記した。)

5・3・2 信濃夜話における記録

―「鷹太刀祭」を記す唯一の一次史料

【信濃夜話】は幕末の勝山藩士である遠山長嶺⁷による松尾に赴いた時の紀行文である。【菱実記聞】内の注釈によると、遠山長嶺が「文政十一年竜門寺殿御法口の為彼地に赴きしときの紀行也」と書かれている。文政十一年は1828年で、竜門寺は小笠原信貴の論⁸で、口は判別不能だが法要とかそんな感じの意味であろう。信貴の二百五十回忌の法要が文政十一年三月二十四日が行われていることは別の記録で確認できる^[19]。この三月の法要のために遠山は鷹太刀祭に近い時期に松尾に訪れたのだろう。この原本の所在は不明で、詳細な内容と全容を確認することは出来ないが、前節の通り【菱実記聞】においてしばしば引用されている。ただ

⁷ 遠山長嶺は勝山藩士であるが、信濃飯山藩(長野県飯山市)藩主・本多豊後守助賢(藩主在任1806-1858)の和歌の師であった^[18]。

⁸ 信貴は戦国時代の松尾小笠原家の当主で武田信玄に臣従し、松尾の地を府中家から取り戻した人物。松尾の竜門寺に葬られている。小笠原家の家譜では天正七年(1579)没となっている。ただし、信貴の没年には天正七年(1579)と永禄四年(1561)二説存在している^[7]。

し、その表記が【信濃紀行】であったり【信濃夜話】であったりと定まらないが、本稿では【信濃夜話】と表記する。（信濃夜話というタイトルの紀行文なのだろうとは思ふ。）この【信濃夜話】に、松尾の八幡で三月十五日に祭祀があり、これを鷲ノ太刀祭という別当が言っていたことを記録しており、これが江戸時代における「鷲ノ太刀祭」という名称を示す唯一の一次史料となっている。（少なくとも私が調べることできた範囲内では。）

【信濃夜話】 遠山長嶺 文政十一年（1828）

神宮寺の旧記をみるに正嘉二年十一月長政君のとき上輩奉行常葉常陸守とあり宗長長秀光康定基信實五君のときも御修補あり 奉行人名口之

当社の祭礼八月十五日也臨時祭三月十五日也是を鷲の太刀祭と云と別当云へり

（【菱実記聞】内の内容をそのまま引用。原文ママかは不明。）

「鷲ノ太刀祭」の歴史をひも解くうえで非常に大事な文献なので、7 ページと同じ内容だが、ここでもあらためて引用した。

5・3・3 越前勝山の記録

ここでは勝山藩時代の小笠原家や、小笠原家家臣による勝山城内の八幡宮で行われていた三月十五日の祭祀の記録に関して【菱実記聞】と【信濃夜話】以外に関してまとめる。一部は【菱実記聞】内における引用と重複しているものがある。

松尾の八幡の祭祀に伊豆木小笠原家関わっていた記録が確認できる。この享保九年の日記は家老級の三人の者が交代で記録していた。三月十五日は沢合伝左衛門が記述。

【享保九甲辰御日記】 享保9年（1724）^[26]

三月
十五日己丑快晴夜二入雨降 沢合伝左衛門
一 嶋田八幡祭礼二付代参虎岩清左衛門遣エ騎馬也

八月
十五日乙酉雨天 沢合伝左衛門
一 如例八幡爲祭礼嶋田八幡宮江代参遣

5・3・6 松尾・勝山以外の記録

松尾小笠原家は豊臣泰吉による小田原征伐後の徳川家康の関東移封にともなつて松尾から武蔵国新庄に移封された。江戸幕府開府時は武蔵国本庄の藩主となり、その後下総国古河、下総国関宿、美濃国高須藩主となった。小笠原家の勝山藩移封以降の記録が正しければ、八幡宮をそれぞれの地に遷宮して祭祀を行っていたはずであるが、そのことをリアルタイムに示した史料は見つからない。高須藩主時代に徳川家光の命により編纂の【寛永諸家系図伝】^[38]には結城合戦と鷲ノ太刀拝領のくだりは記載されているが、三月十五日に政康が八幡で軍立てしたことや小笠原の祭祀の日に関しては触れられていない。

【八幡宮菱華銘】 脇屋嶺忠 元禄5年（1692）^[15]

政康君承大樹義敦將軍之鈞命。為伐結城之副將。維嘉古元年西三月十五日。軍於八幡之廟而赴総州。攻撃結城七郎光久。四月十六日拔結城之柵。擒春王丸安王丸於日光山。凱旋之路入濃州時大樹之命有焉。故誅干同州垂井駅金蓮寺。此時大樹以感状並鑑雄劍^{銘及成}褒賜政康君。因而後三月十五日臨時祭于此。今猶不忘。政康君八世之孫信嶺君天正十年秋移封於武州児玉郡本庄胄子信之又賜下総古河城其世子政信君元和二年十月移封関宿城政信胄子貞信君寛永十七年秋移封濃州石津郡高須城元禄四年移封越前大野郡勝山於是卜地択材作秀尾之両廟祭以時歴仕君家五世之小臣嶺忠鑄銅鏡。記平日所聞旧口之事於鏡背。伏翼千秋万歳誠恐誠惶再拜云。昔元禄五年壬申春三月十五日脇屋金左工門源嶺忠。脇屋四郎兵工門源房明。脇屋八郎源嶺助。塩原半左工門源嶺連。鑄工森田武蔵藤原吉次。與仕於貞信儒医万寿軒貫一子武川元常君。与嶺忠有親戚之好。猶且爲這之友作銘曰
虚靈不昧 不昧虚靈 事来不昧 物去虚靈

⁹ 大樹：將軍のこと。鈞命：君主の命令、欽命。
¹⁰ この銘文では、春王丸と安王丸を結城落城後に日光で捕えたと言われているが、捕えたのは結城落城の時である。勝山小笠原の記録には他にもそのような系列で書かれた記録が散見される。結城合戦の前に足利持氏の遺児が日光に逃れていて、その搜索を政康が命じられていたともされる。伝承ではこの時日光に逃げたのが春王丸と安王丸とされているが、最近の研究では他の遺児であったことが指摘されている^[4]。
¹¹ 誠恐誠惶：心から恐縮し、畏敬すること。
¹² 福井県大野郡誌内の翻刻では「昔」と記載されているが、菱実記聞内の記載を見ると冠の部分の縦棒が日本てなく二本に見え、上の横棒は「昔」のようには縦棒から飛び出していない。

5・3・7 小倉小笠原家の記録

小倉小笠原家（府中家）の祖の持長は政康長兄の長将（家督は継いでいない）の子であるが、小倉小笠原の家伝においては持長を政康の嫡男としている。これは嫡流を標榜するための粉飾であろうと思われる。そのため、政康の戦功などは家譜に記載されているが、小倉家には政康が八幡宮前で軍立てして結城合戦に出陣したという伝承は伝わっていない。しかも小倉小笠原の家譜においては、永享十一年に終結した永享の乱以降持氏遺児搜索のため永享十二年の結城合戦開始まで信濃に帰国していないことになっている。（本件の詳細は5・4で議論する。）

一方で小倉小笠原家は1802-05年に、小笠原家に関する史料類を収集し纏める作業を行っており、その中で小倉小笠原にとって父祖の地である信州松尾の八幡に関する記録がある。

【御当家末書】 卷十三^[28]

伊賀良庄嶋田八幡宮祭礼之事
或書に曰、信濃国伊奈郡伊賀良庄嶋田村八幡宮は、正嘉元年丁巳十二月二日小笠原信濃守長政、山城国男山の八幡宮を勧請し宮社を造営あり、松田左近大夫藤原清祇を社職とし国家の安全を祈らしむ、永享十一年己未小笠原大膳大夫政康下野国結城に出陣の時、当社に祈誓ありしは、今度軍功あるに於ては臨時の祭祀を始めんとの事也しか、帰陣有て後三月十五日の祭りを始めしむ、夫より毎年両度三月十五日八月十五日の祭りを行ふ也
或説に山城国男山・相模国鶴岡に於て、三月十五日の祭祀あるものは、則当社を以て権興すと云なり

ここでは、或書に曰くとあり三月十五日の祭祀のことに関して

棟札

悲哉清祇より二十一代之神職を此所に断滅す。此跡を則野池之瀬宜大平氏へ神職を渡す。享保六年丑年氏子寄進を以御隨身門建立す。享保十一年江戸東叡山宮榎御執成を以松田氏追放御免三日市塩村に居住す。

社地之内南方に阿弥陀堂有り。神宮寺持。

この史料は、三月十五日の祭祀と小笠原政康の結城出陣前の軍立てを関連付けつつ結城への出陣を永享十二年の五月としている珍しい資料である。原文なのかは翻刻したときにミスったのか不明だが、その不一致からか祭日が五月十五日となっているが、他資料と合わせると三月十五日が祭日であることは間違いない。この出陣時期に関する矛盾に関して、5・4において詳しく議論するが、政康の結城出陣の時期に関しては史料に於いてまちまちである。ともかく、松尾の八幡宮においても江戸中期においても政康の結城出陣と三月十五日の祭祀がしかと関連付けられていたことを示す貴重な史料だ。

【信濃州伊那神社仏閣】 宮崎言周 寛保年間 (1741-44) ^[24]

●伊那郡飯田領伊賀良庄

是を下郷と云、城下の松川より南の分二十一ヶ村に分る

嶋田郷 私云如此の出家を別当と云事、別に不叶公家には有、又武士の長たる仁を別当と云、出家は社僧也。

檢非違使の別当杯は参議中將或は大中納言、右衛門、左衛門、兵衛督を

【八幡菱華銘】は、小笠原家が勝山藩に移封された元禄四年(1691)の翌年・元禄五年(1692)の勝山における初めての三月十五日の臨時祭に、松尾時代からの小笠原家代々の家臣である脇屋嶺忠により信州から勝山に至るまでの小笠原家の概略が書かれた銘文と思われる。この引用では省略しているが、小笠原家中興の祖貞宗が信州松尾の神宮寺を祈願の場としたことが記されている。その後、引用部のように政康が將軍の命により結城に出陣の際嘉吉元年三月十五日に八幡の廟前で軍立てしたこと、結城合戦の戦功により感状ならびに鸞丸を將軍から下賜され、それ以降三月十五日を小笠原家の臨時祭とし、本庄、古河、関宿、高須と移封のたび八幡を遷宮時祭祀を行ってきたことを記している。タイトルが【八幡菱華銘】とあるのでこれは勝山に新たに遷宮した八幡宮に奉納した銘文なのであろうか。この原本の所在は不明であるが、【菱実紀聞】内において全文引用されているため、その内容を確認することができる。また、【福井県大野郡誌・下編】^[17]においても全文が翻刻されている。

ちなみに、この【八幡菱華銘】は今のところ筆者が目にした史料の中で唯一江戸時代に於いて「鸞丸」という表現を用いている史料である。

【松尾小笠原の大略】 原成興 ^[13]

越前国勝山に遷宮被成候八幡宮の御事、もとは信州伊奈郡松尾に安置被成候、当時信辰公より十一代御先大膳大夫政康公、結城戦場の副将ぐんを蒙れ候節、右の尊容を松尾に安置被成、その時おふひに御軍功ありて尤代々信厚の御事なり、松尾より武州児玉郡

兼たる人職之也

八幡邑 新義高野山比室院久永寺末山

○別当眞言宗隆松山 神宮寺常徳院

○一八幡宮 御朱印五石南原文永寺舩下

○△神主 御朱印十石 大平大隅守

当社は古へ当郷松尾の城主小笠原代々の尊敬也。又神宮寺の開山は正嘉元丁巳年権大僧都阿闍梨良俊の開基也。其後永禄十一年辰年小笠原下総守信貴公再興す。天正年中信貴公の御世子松尾掃部大夫信嶺公没落及破壊。

慶長六巳年朝日受永御證文に八幡宮領十五石の内、五石神宮寺領、十石社家領也。従公方御代々御朱印被下之、神宮寺に納る。

元和三年より飯田の太守脇坂氏宮者修補し玉ふ。寛文十二年より同太守堀氏菅原親昌公以来御代々被加修理、毎年三月十五日行祭礼。

寛保元年(1741)以降に編纂された宮崎言周による【信濃州伊奈神社仏閣】は、その原拠は七十年ほど遡る寛文十二年(1672)の脇坂家から堀家への飯田藩の引き渡し時の寺社書上、更に言周の蒐集した史料をもって補綴されたものである。この史料には、由来は記されていないが三月十五日に八幡宮で祭祀が行われていることが書かれている。

5・3・5 信州伊豆木小笠原家の記録

松尾より10キロメートルほど離れた伊豆木に、慶長5年(1600)に松尾小笠原家より分家した寄合旗本の小笠原家が陣屋を構えていた(伊豆木小笠原)。この伊豆木小笠原家の日記が残されており、そのうち一部であるが翻刻活字化されたものがある。その中には

本庄に遷宮、本庄より下総国古河に遷宮、古河より同国関宿に遷宮、関宿より濃州高須に遷宮、高須より越州勝山に遷宮なり、是を松尾の八幡宮と申し奉り候、別当の院松尾山神宮寺

【松尾小笠原の大略】は松尾より勝山に至るまでの小笠原家の概略が示されており、信胤に関してまで記されている。「三月十五日の祭祀」に関する直接的な表記はないが、松尾より八幡宮を移封のたびに遷宮し、勝山に至ったことが書かれている。

【御旧記】 長教の代(1780-99)のことまで書かれている。

原本の所在不明。内容省略・【菱実記聞】(7)ページを参照。

【越前勝山小笠原家譜】 天保二年 ^[1]

《永享十一年の持氏自害および、結城氏朝が日光に隠れていた春王丸安王丸を奉じて挙兵したことについて》これより先、長清¹³六世の裔宗長、その曾子貞宗、弓馬の術を以て後醍醐帝の寵榮を拝浴す。而して金門を試射し、丹庭を調馬し、辱なくも紫綵の暈を許さる。ここに於て武家の定式となすべき一流の宣旨を蒙る。故に天下浩然としてこれを宗としこれを師とす。貞宗地をトして河利を創建す。その一暈秀山開善寺を以て墳墓の地となす。その一松尾山聖胎院神宮寺を以て祈願の場となす。曾子政長、先考貞宗を追崇して八幡神に従祀す。すなはち神宮に置く衣冠の像これな

¹³ 小笠原長清は甲斐源氏の系統の加賀美遠光の子で小笠原の祖。

¹⁴ 後醍醐天皇は鎌倉幕府を倒し建武新政を行った人物。貞宗は足利尊氏らと共に討幕運動に加わる。其の後、尊氏が離反したとき小笠原貞宗も尊氏に従った。

り。《中略》同十二庚申年三月十五日、八幡の廟廡に軍し、而して下野国に赴く。会する京兵号して十万余騎となす。旗々千里に涉り、玄甲野を蔽ふ。昼夜の攻撃、更に間断なし、然れども等素より闘略に精しき故、機に随ひ変に応し、防術を失はず。嘉吉元年辛酉年、城中火あり、四月十六日城遂に陥る。《略・結城落城の後》に日光に春王丸・安王丸が逃れ、政康が捕えられた。¹⁵其の後、二児を美濃の垂井駅金蓮寺において誅した。《義教甚だその戦功あるを以て、感状並に友成の太刀と鷹太刀を下し賜ふ。その状に曰ふ、

今度結城館事即時攻落凶徒等悉討捕刺虜春王丸安王丸畢
武略無比類尤感思食候仍鷹太刀友成一腰遣之候也

政康これより、三月十五日を以て当家執事の神拝となす。三月十五日の祭祀これに鑑勵す。¹⁶通代綿々として今に至るなり。

(《越前勝山小笠原家譜》の原文は漢文で書かれているが、【信濃史料】同に書き下し文があるのでそれを記載した。)

【越前勝山小笠原家譜】は、幕末の天保二年(1832)に編纂された小笠原家の家譜である。これより以前にも幕府編纂の【寛永諸家系図伝】^[38]のために提出した家譜や先述の【御旧記】などが存在しているはずであるが、小笠原家がまとめたものとして全容が伝わっているのはこの【越前勝山小笠原家譜】であり、明治以

¹⁵ 勝山小笠原の記録では、日光に春王丸・安王丸が逃げたのは結城落城後とする史料が多い。この【越前勝山小笠原家譜】では、結城合戦前と結城合戦後の二回日光に隠れたことになっている。他の「永享記」等の史料では結城合戦前に日光に隠れたことになっている。(最近の研究では、持氏の他の遺児であったとの指摘も。)

¹⁶ 遡觸：物事の始まり。

一 右付御初穂青銅は御元方より受取、目録並御名札御祐筆に面為認、前日御名代御家老中江差上候事

八月十五日

《略・三月十五日と同様》

長守の時代の小笠原家家臣の御用留(日記)に、三月十五日と八月十五日の城東の八幡宮の祭祀に家老が名代として出席している記録がある。これは長守の代の記録というのはわかるが、勝山在城の年の記録なのか、江戸が大坂加番の年なのかはわからない。ともかく、これは三月十五日の祭祀を小笠原家内において行ったことの直接的な記録である。

5・3・4 信州松尾の寺社記録

小笠原家は天正十八年(1590)に徳川家康の関東移封に伴って、本庄に移封された。それからしばらく松尾の八幡宮は荒廃していたとされる。家康は松尾小笠原家に小笠原旧領を復帰しようとするが、当時の当主は信嶺の養嗣子であった信之でこれを拒否する。(信之は家康重臣の酒井忠之の三男で、信嶺の娘婿。)府中小笠原家の秀政が飯田城主として入封され再建されたとされる。

江戸中頃の吉宗の時代に編纂された神社仏閣に関する史料が二つ存在する。元文年間(1736-41)に書かれた【伊那郡神社仏閣記】と、寛文十二年(1722)を原拠とし、寛保年間に書かれた【信濃州伊奈神社仏閣】である。ここには、松尾の八幡宮において三月十五日に祭祀を行っていたことが書かれている。とくに、前者の史

降の様々な資料で参照されている。【菱夷記聞】の編纂は天保三年から行われているが、この家譜の内容は反映されていないようである。政康が結城合戦に出陣前に松尾の八幡前にて軍立てし、戦功をあげたことを示し感状と友成の太刀鷹太刀を下賜されたことを記している。5・4章においても議論するが、これ以前の小笠原家の歴史をまとめたものが政康の出陣を嘉吉元年三月(1441)としているのに対し、【越前勝山小笠原家譜】のみが永享十二年(1440)としている。(出陣の時期に関する検証は5・4で検証。)

【松井家文書・年中行事】

三月十五日

一 八幡宮御祭礼に付月次御祝儀無之

一 八幡宮御祭礼に付左之通

御初穂 青銅五十疋

御名代

御家家老

出役

御武頭彦人

御奉行彦人

大目付彦人

御破損奉行彦人

御武器左之通

一 鉄砲五挺胴乱共玉箱一荷 御武頭掛

一 弓三張鞆共 矢箱一荷 同

一 長柄槍 五本 御奉行掛

一 三ツ道具 大目付

以上

料ではその由来が小笠原政康の結城合戦での軍立てであることが書かれているが、「鷹の太刀祭」という名称は記していない。

【伊那郡神社仏閣記】 関盛胤元文年間(1736-41) ^[22]

嶋田郷

八幡村

一 八幡宮 神主 大平氏

別当 真言宗陸松山 高野山比叡院永久寺 神宮寺常智院

御朱印十五石 内十石 神主領

人皇八十八代後深草院御宇正嘉元年大守小笠原信濃守源長政

山州男山此所へ移し副祭に生坐氣長足姫武内宿禰を左右之相

殿として一郡の鎮護として尊敬す。

此時神主松田左近大夫藤原清祇と云。

同年神宮寺開基す。権大僧都阿闍梨長俊也。

一 永享十二年申五月小笠原大膳大夫政康將軍足利義教之奉三台命ヲ総州へ発向。此時当社に宿願して戦場に於レ有レ功、可致ニ臨時之祭也と。果て功有て安王丸を搦捕上方へ渡す。其後当社に始て三月十五日を始む。従是五月十五日祭礼。此時神主松田左近大夫清尚也。

一説に政康之像を作て八幡の宝殿に納むと云。又一説に開善寺に大鑑禪師之像貞宗之像なるべし。大鑑禪師貞宗之像を安置せしに何之頃よりか貞宗之像なしと云。予是を以考るに貞宗之像なるべし。八幡之神前に有之は黒之束帯をさ冠や貞宗正三位なれば也。政康は従五位上なれば也。